

小児看護学演習におけるシミュレーション教育の評価—ARCS 動機づけモデルによるシミュレーション室と実習室との演習比較

松井由美子、坪川麻樹子、安藤萌、荒木恵子
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】近年、看護学教育においても学習者中心の方法として実習前後や卒業時にシミュレーション教育を取り入れる教育機関が増加している。3年生の演習では学生が実習室とシミュレーション室の両方を体験する設定であり ARCS 動機づけモデルを使って部屋ごとに平均点を比較することが可能であった。シミュレーション室での演習と実習室での得点比較を行ったので報告する。

【方法】3年次前期必修科目「小児看護学演習」を履修した3年生96名は6名ずつ16グループに分かれ高機能シミュレーション人形を使用するシミュレーション室2室（乳児と小児）と実習室2室（乳児と小児）で1グループが2回ずつ2日間の演習を行った。1回目はバイタルサイン測定と報告、2回目は喘息児のアセスメントとの吸入の事例であった。実習後に ARCS モデルを使用した評価表を記入してもらい集計分析を行った。

学生には評価時に研究に使用することを口頭で説明し、文書にて同意を得られたものを分析対象とすることを説明した。新潟医療福祉大学倫理審査委員会で承認を得た。

【結果】アンケートの回収は1、2回目とも配布96名、回収93名で回収率96.9%であった。項目ごとの平均値は表1に示した。C2「シミュレーションを実施することで成功体験の機会が与えられた」の項目を除きすべてシミュレーション室のほうが高かった。T検定においてA1「シミュレーション演習を行うことは私たちの興味を引いた」とR2「シミュレーション演習の目的は私たちの期待や目的に沿っていた」の2項目が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。

項目内容は以下のとおりである。A-1:シミュレーション演習を行うことは私たちの興味を引いた。A-2:シミュレーション演習の内容を考えることは刺激的だった。A-3:シミュレーション演習を行うことは新鮮だった。R-1:シミュレーションの事例は親しみやすい内容だった。R-2:シミュレーションの演習の目的は私たちの期待や目的に沿っていた。R-3:シミュレーション演習に私たちは積極的に参加した。C-1:シミュレーションの内容は易しすぎず難しすぎず適切であった。C-2:シミュレーションを実施することで成功体験の機会が与えられた。C-3:デブリーフィングを行うことで成功した部分を確認できた。S-1:シミュレーション演習でこれまでの知識や技術を使う機会となった。S-2:デブリーフィングを行うことで適切な知識や技術を確認できた。S-3:シミュレーション演習の評価は公平であった。

表1. 実習室ごとの項目ごとと平均値

演習室	度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
A1 Sim 室	94	4.81	.422	.044
実習室	92	4.64	.566	.059
A2 Sim 室	94	4.79	.437	.045
実習室	92	4.66	.519	.054
A3 Sim 室	94	4.84	.423	.044
実習室	92	4.72	.541	.056
R1 Sim 室	94	4.50	.618	.064
実習室	92	4.43	.599	.062
R2 Sim 室	94	4.61	.533	.055
実習室	92	4.43	.599	.062
R3 Sim 室	94	4.77	.474	.049
実習室	92	4.72	.561	.059
C1 Sim 室	94	4.48	.582	.060
実習室	92	4.43	.580	.060
C2 Sim 室	94	4.43	.647	.067
実習室	92	4.45	.669	.070
C3 Sim 室	94	4.66	.520	.054
実習室	92	4.54	.636	.066
S1 Sim 室	94	4.60	.555	.057
実習室	92	4.59	.558	.058
S2 Sim 室	94	4.67	.495	.051
実習室	92	4.62	.571	.060
S3 Sim 室	94	4.46	.771	.080
実習室	92	4.43	.775	.081

【考察】ARCS 動機づけモデルは、J.M.Keller が提唱したモデルで学習意欲を、注意（Attention）・関連性（Relevance）、自信（Confidence）、満足感（Satisfaction）の4つの側面ととらえ鈴木によって我が国に導入された。その4分野を演習用の評価項目に当てはめ、独自に小児看護学シミュレーション総合評価表を作成し演習の比較に用いた。C-2の項目は「成功体験の機会が得られる」というもので、そこまで感じるのには難しく、シミュレーション室のほうが操作上の難しさもありより低くなったと考えられる。興味や、刺激的、新鮮といった部分ではシミュレーション室を使った方が臨場感も高くより高い得点につながった。その点でA1は有意に高く、またR2も実習室よりわくわくしながら演習できたのではないかと考える。

【結論】シミュレーション室のほうが学生にとってはより興味を引き、期待や目的に沿った内容であった。

【文献】

1) 鈴木克明:「魅力ある教材」設計・開発の枠組みについて—ARCS 動機づけモデルを中心に—, 教育メディア研究, 1: 50-61, 1994.